

札幌の自然環境 ②

— 北部地区の緑地計画についての提案 —

辻 井 達 一

都市環境における残存自然植生

札幌市北部地区は一般に平坦な沖積地で、現存植生としてはハルニレ、ヤチダモおよびハンノキ林がもっとも代表的であることを述べた。この内、ハルニレ群集の占めるところはすでに明治年間から宅地化が行なわれており、現在では北海道大学キャンパスなどごく限られたところにしか、まとまった群落をみることはできなくなっている。宅地化されたところではもちろん伐採されて木は残っていないし、大学キャンパスのように残されたところでもその林床はケンタッキー・ブルーグラスなど人工草地におきかえられたところが多く、自然植生はほとんどみることができない。

ハルニレ残存林の内、大学キャンパス以南ではイタヤカエデ、ヒロハノキハダ、ミズナラの混生がみられるのに対し、たとえば丘陵空港附近などではヤチダモ、ハンノキなど、より湿性の樹種が多く混生するのがみられる。林床植生もまた前者では比較的容易にケンタッキー・ブルーグラスを主とする人工草地への置き替えが行なわれるのに対し、後者ではヒメスイバ、エゾギンギシ、チヂミザサ、イワノガリヤスが優占するか、あるいは少なからず混生する場合が多い。

札幌北部地区のように、ヤチダモやハンノキ群集の占める割合の大きいところで、残存自然植生としてはハルニレ群集がむしろ多いことは大変興味深い。ヤチダモ林やハンノキ林が防風林や牧場の庇陰林として生かされることはあっても、一般緑地や庭園用としては、これらの樹種がハルニレほど歓迎されなかつたためであろう。ヤチダモやハン

ノキの牧場の庇陰林としての例は、現在でも二、三の箇所で見ることが出来る。

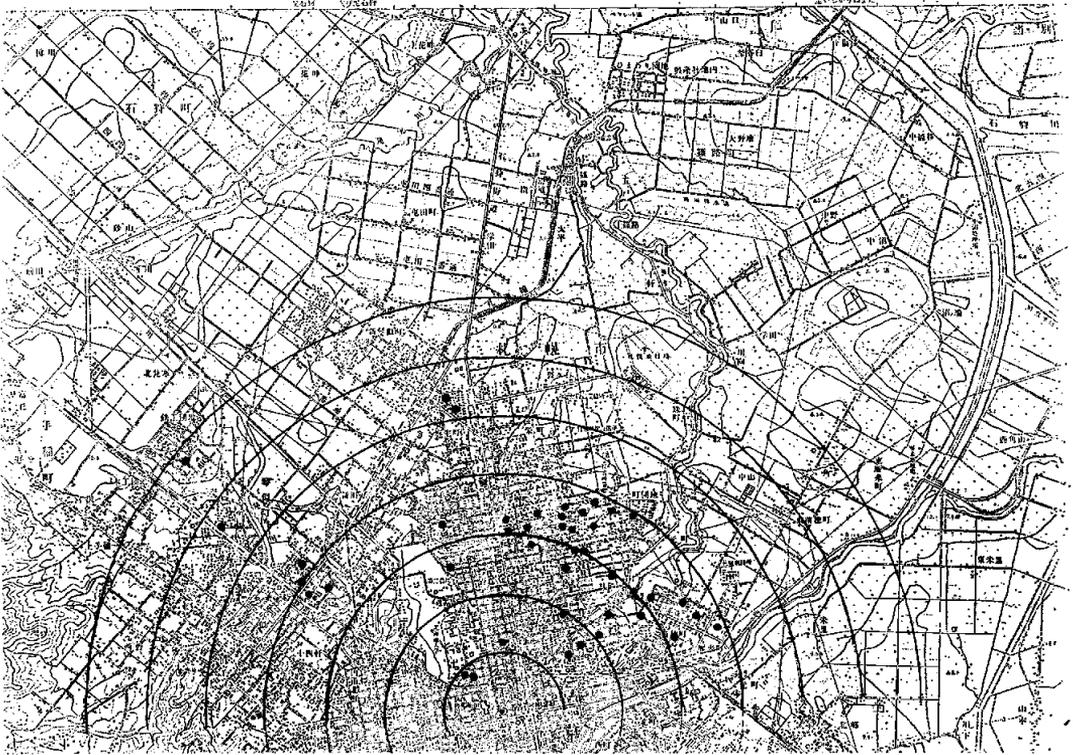
緑地の組成と分布

北部地区の現存する緑地の分布をみると第一図に示されるとおりで、北部地区の中ではほとんど南半部に集中している。その植生は第一表に示されるように、圧倒的にハルニレ林のものが多く、ヤチダモあるいはハンノキ群集域については、屯田団地以北ならびに新琴似以西に帯状の耕地防風林の形で緑地が設定されているが、団地としてまとまった地積のものはない。かつてヤチダモ林が（流路に沿ってなど）存在したところで、現在、ポプラ林におきかえられているところも多い。このようなところでは、林床植生としてイワノガリヤスやヨシを優占種にもつ場合があり、新琴似から茨戸に至る間などにその例がみられる。

ヤチダモの耕地防風林については天然であったも、あるいは人工林であっても林床群落には極端なちがいはない。もちろん群落の構成要素は天然林のほうが多く、人工林のそれはより単純ではある。しかし、両者ともに湿性の林分ではヨシ、イワノガリヤス、キツリフネ、ミズバショウ、バイケイソウをふくむことが多く、乾性の林分では主としてササが優占する。

ヨシ・ハンノキ群集は、面積的には広い地積を占めていたものと推定されるが、林地（緑地）として残されているところはほとんどない。もちろん、新たに緑地としてこの林が造成されたところもない。新琴似から手稲にかけて、ならびに手稲町周辺に小団林

第1図 既設公園・緑地の分布



第1表 群落からみた緑地・公園

緑地・公園名/群落型	U	F	A	P*)	緑地・公園名/群落型	U	F	A	P*)
1**)美香保公園	U				97 東栄公園	U			
6 さつき公園	U				98 大空公園	U			
7 新生公園	U				ハミはるき公園	U			
16 若草公園	U			P	ヘタものき公園	U			
17 北光公園	U				こまどり公園	U			
29 苗穂公園	U				いずみ公園				P
42 麻生北公園			A		ワすみれ公園	U			
43 麻生南公園			A		ヨつくし公園	U			
51 北園公園	U	F			タひまわり公園		F		
53 あざみ公園	U				幌北公園	U			
54 しらゆり公園	U				八軒西公園	U			
55 こぼとけ公園		F			元鹿原公園				P
56 あおぞら公園	U				清華亭児童公園	U			
57 ひばり公園	U				は琴似まりも公園	U			
61 鉄興公園				P	北海道大学	U			
66 北栄公園	U				藤女子大	U			
72 しらかば公園	U				北斗高	U			
73 明園公園	U				大谷短大	U			
89 ホップ公園	U				天使短大	U			
90 新穂公園	U								
91 すずかけ公園	U								
93 白鳩公園		F							
94 大友公園		F							
95 法国公園		F							
96 あさひ公園	U								

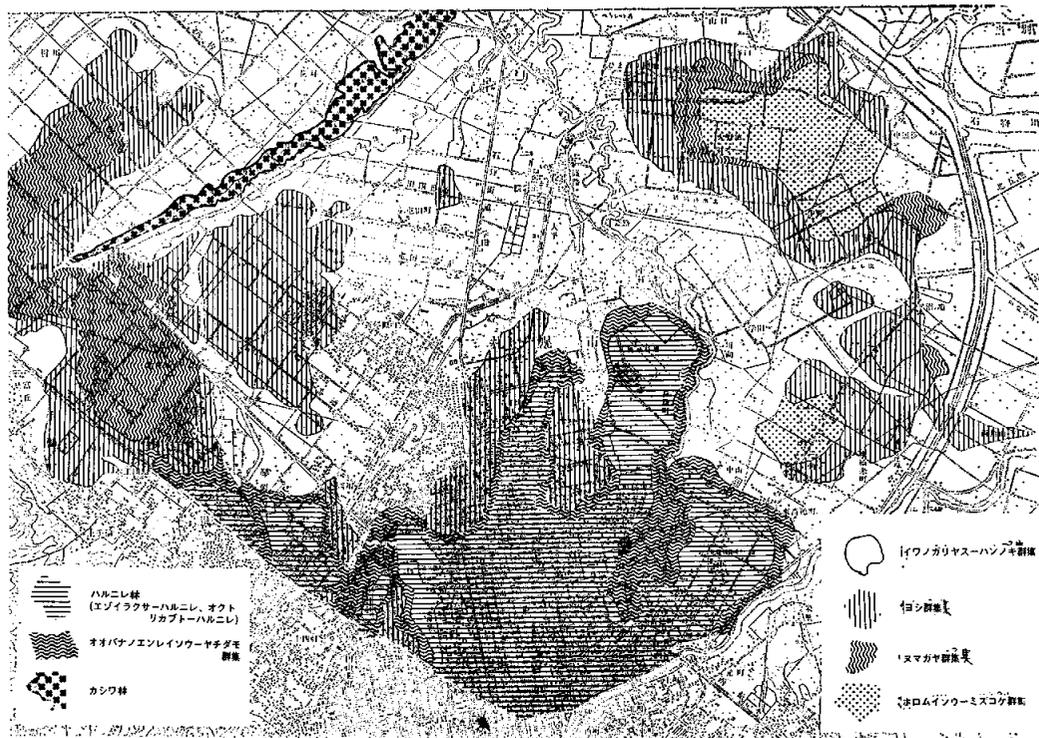
*) U: ハルニレ F: ヤチダモ
A: ハンノキ P: ヨシ

**) 札幌市都市計画図による番号および記号

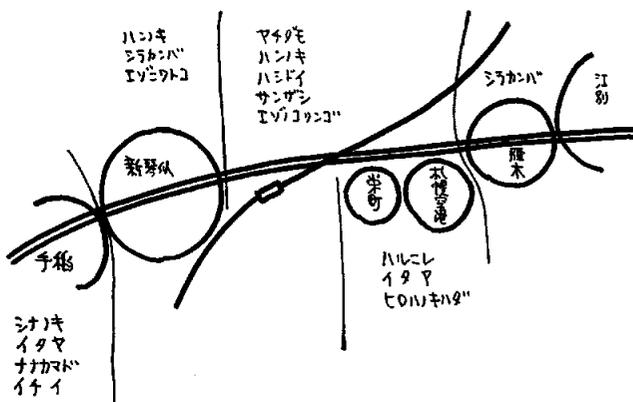
緑地計画についての提案

があり、ここでは林床にミズバショウ、トタサなどがみられる。
 北部地区だけの問題ではなくて、あらゆる都市近郊の自然植生の保存、あるいは緑地計画に關しての自然植生の活用は重要な課題である。こういう点では古くからきわめて限られた地積の自然植生、ないしは境内林などの半自然植生しか残されていない本州以

第2図 北部地区の潜在自然植生図



第3図 道路植栽の一試案



限られた数の庭園だけで、しかもこれらはすべて市の中央部は四キロ方形区内に集中している。ことに北と東には、美しい自然といえるものはほとんどない。

都市の発達には、誕生、成長、そして時に衰微まで、しばしば生物のそれにとえられ。したがって、それぞれの過程に相応する自然の背景が与えられなければならない。

北部地区の場合、耕地防風林の形で残されたわずかな自然植生の保護と、緑地空間としての積極的利用を計ると同時に、潜在自然植生の調査資料にもついで、土地の能力を最大限に引き出し、将来の都市発達にそなえた新しい緑地がじゅうぶんに準備されなければならない。

南各地のほうが、むしろ保存には関心が強かったともいえる。北海道のように、都市近郊でも比較的自然植生が残されている（ないしは残されていると信ぜられている）ところでは、むしろそれらはなし崩しに、急速に失われて来た。

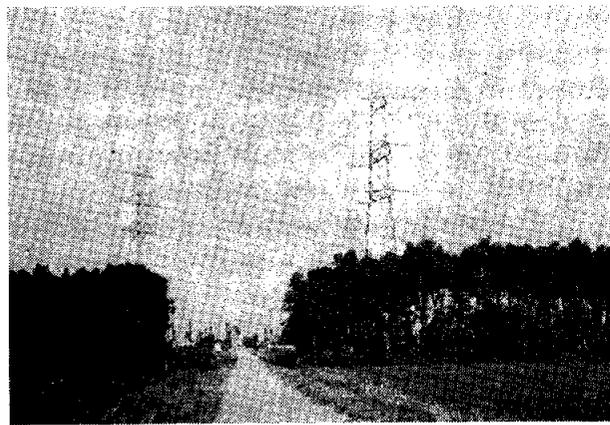
札幌近郊でいえば、札幌の形成はわずかにここ百年にすぎないのに、山地あるいは丘陵にしてもわずかに円山と藻岩山が辛うじて残されたにすぎず、平地の自然植生にみるべきものは石狩海岸の砂丘林と、野幌原始林が挙げられるだけである。都市部の緑地空間として少なくともなお自然植生の一部を保有しているのは植物園、大学キャンパスの一部、ならびにごく



北大構内のハルニレ林



ポプラ並木



ヤチダモの防風林

在来型の公園緑地は大きさはともかくとしてそのおのおのを、た

§

きである。

マアジサイなどの灌木類の他、ところによつてはミズバショウ、バイケイソウ、エンレイソウ、オオバナノエンレイソウ、スイセン、シラ、キオノドクサなどの植栽があるといふ。ツタウルシやツルアジサイなどのツル植物もとり上げられるべきである。

§

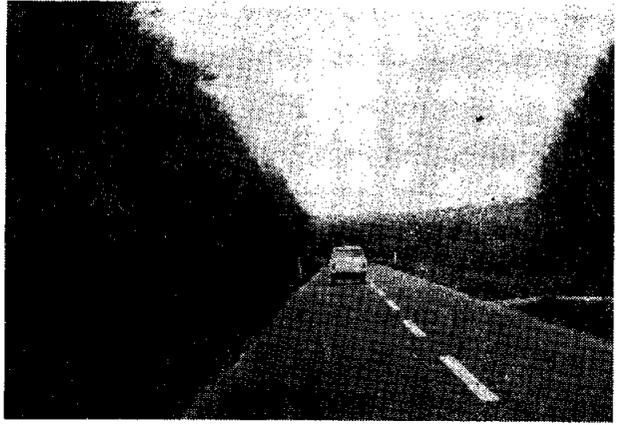
北部地区の緑地を考えるうえで、もつとも重要なものの一つに道路がある。西を山地に占められている札幌の地形的条件から考えて、いくつかの大規模な道路が北部地区を通ることは当然予想される。しかも、いわゆる石狩新港の建設とこれに付随する諸施設との関連道路の問題もあるから、従来の拡大する住宅地と都心部とを結ぶだけの機能をもった道路では済まなくなる。

交通の速度と用途がちがってくればそれに相応する付帯施設として、大きな緑地帯が考えられなければならない。鉄道に沿った緑地として昔から防雪林、防風林がかなりの幅で設けられていたように、こうした道路にも単なる在来形式の(単列の)並木としてでなく、じゅうぶんな幅をもった緑地帯が設けられなければならない。ただし、単列の在来型並木でもそうだが、あまりに規則的な植栽は、しばしばその単調さから眠気をも

よおすことさえあることに注意が払われなければならない。その意味では、鉄道防雪林のように単に風や雪に対する物理的効果だけでなく、心理的な問題も考慮される必要があるだろう。

植物学的な見地からは、たとえば手稲富岡あたりから新琴似を経て雁来、江別へのルートを想定したような場合、沿道植栽樹種は第三図のように変化をもたせるように選定される。

緑地帯は必ずしも、つねに連続していなければならない理由はない。高速道路で切り通しをぬけて視界が開けるとドライバーの注意が高まることから知られていることから考えても、地形的変化に乏しい北部地区では、緑地帯も断続して設けるか、あるいは時に道路に直交する緑地帯があつてもいい。この目的には既存のヤチダモ防風林などがそのまま利用し得る。緑地帯の林床や林縁にはハシドイ、サンザシ、エゾノコリンゴ、エゾニワトコ、サビタ、ヤマアジサイなどの灌木類の他、ところによつてはミズバショウ、バイケイソウ、エンレイソウ、オオバナノエンレイソウ、スイセン、シラ、キオノドクサなどの植栽があるといふ。ツタウルシやツルアジサイなどのツル植物もとり上げられるべきである。



断続し樹高の違う道路周辺の植栽例



単列の並木は美しいが変化がない



切通しと植栽を組み合わせると効果的である

たとえば非常に特長をもった樹種によって区別するなどの方針が立てられたほうがいい。都市の目標として古い由緒ある建築物などがまったくなく、小山やいちじるしく大きな池などにも乏しいところとして、特有の形なり色彩などをもった緑地が果たすランドマーカーとしての役割は大きいものになるはずである。

樹種としてはヤチダモ、トネリコ、ササfras、オニグルミ、サワグルミ、メダセコイア、ドロノキ、シダレヤナギ、ケシウヤナギ、ユリノキ、センノキ、カツラ、スマツク、ミズナラ、シラカンバ、トチノキなどが考えられ、林床植生としては前述の草本のほか、ヤマドリゼンマイ、オシダ、リョウメンシダ、クサソテツなどのシダ類の利用が可能である。

小公園のほかに、住宅地の大区分、あるいは工業地帯と住宅地帯との分離などを目的としたシェルター（遮蔽林）の設定も考慮される。位置としては茨戸から砂山に至る紅

あつかうことはさげなければならぬ。

というのは、いままでの都市公園や緑地ではしばしば無秩序な植物導入の例が多く、じゅうぶんに立地の特性を生かされなかつたことである。花壇や、建築物周辺の植栽にとどまる場合にはどういふ植物が採用されようがかわらないともいえるが、大きな緑地については都市計画上的位置と意味、他の緑地との関連が、立地の条件の一つとして考えられる必要がある。単に樹形や葉が美しいからとか、珍しいからとかいうことだけで樹種をえらぶのは問題である。緑地は植物園ではない。

しかし、やり方によってはその地方なり都市なりを、もっともよく表現する「場」にすることができるとは思ふ。シェルターの効果についてはここに論ずる余裕をもたないが、もしそれが地区の区分を主目的として設けられるのなら、もっとも自由なデザインがなされていいのではないだろうか

（北大農学部助教授）

葉山砂丘、丘珠空港の周辺、豊平川下流域、茨戸半月湖の周囲などに必要であろうと考えられる。これらの林は単に防風林や防雪林の大きなものとして適宜その中に空地（芝地）をはさみ、遊歩道や乗馬道、サイタリング・ロードをもつものにすべきである。この緑地では外来樹種あるいは草本の採用はことにじゅうぶんな注意が必要で、小公園におけるほど自由にとり